

『満蒙之文化』という誌名で創刊した『満蒙』は、文字どおり旧植民地＝満蒙についての総合雑誌であり、第一級の基本資料である。

●復刻の辞

従来、満州（中国東北部）についての研究は、主に政治・経済的側面を中心に行われ、『満鉄調査月報』、その前身誌『満鉄調査時報』、および『満州評論』などが研究資料として復刻刊行されている。そして近年の研究は、文化史、文学史などの広い範囲にわたって、旧植民地・満州を見直す動きにあり、その基本的資料のひとつとして、『満蒙』の復刻が要望されてきた。

『満蒙』は、大正9（一九二〇）年9月、満蒙文化協会発行の『満蒙之文化』創刊に始まり、大正12（一九二三）年4月に『満蒙』と改題し、同時に判型をA4判からA5判にあらため、昭和18（一九四三）年10月まで二八一号、四半世紀にわたって刊行された「満」「蒙」に関する総合月刊誌である。

創刊当初より、「満州」最大の植民地国策会社・満鉄の庇護の下、満鉄

# 満蒙

『満蒙』の前身誌 『満蒙之文化』 を含め復刻 刊行

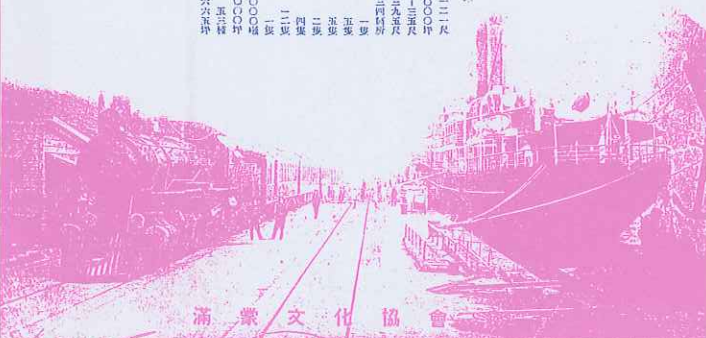
VOL. 1

No. 1

## THE LIGHT OF MANCHURIA 満蒙之文化

第一卷 第一號

○大連港（舊）に於ける船舶の繁栄  
 防波堤建設 一三三二円  
 港内地域昇 九〇〇〇〇円  
 千島橋建設 一三三三三三円  
 岩盤地盤改良 三三三三三三円  
 築堤地盤改良 一〇〇〇〇〇円  
 二〇五五五五円  
 緊縮策力 八千噸鉄 五五五  
 一四千噸鉄 二二二  
 三〇千噸鉄 四四四  
 一〇千噸鉄 五五五  
 一〇〇〇〇〇円  
 五〇〇〇〇〇円  
 六〇〇〇〇〇円  
 五三三三  
 七〇六五五五



満蒙文化協会

調査部の研究成果を毎号掲載するなど、天野元之助、大塚令三、田中忠夫等満鉄調査部の筆者が多数登場する一方、文学、言語、家族、宗教、考古学等、汎く「満蒙」に関する論文、翻訳を載せている。  
 この様な、豊富な内容をもちながら、本誌を所蔵する図書館・機関は少なく、充分利用されているとはいえない。弊社では、全号を三期に分け、刊行する。

不二出版

第一期 全31巻 本体価格 15,980,000円 (大正期)

# 「文装」的、植民地文化運動の機関誌

石堂 清倫

政治評論中心の『満州評論』、経済調査に重きをおいた『満鉄調査月報』と雁行した『満蒙』は、主として文化の方面で在満日本人に情報を提供したのであった。この三誌はともに日本内地にはあまり持ちこまれなかっただけに、覆刻によってはじめてロシア革命以後の満蒙にたいする日本人の知見がどんなものであったかを知ることができる。

後藤新平は南満州鉄道株式会社を「文装的武備の機関」と表現したことがある。経済文化の衣を着た帝国主義という意味であろう。満蒙、とくに旧帝政ロシアの影響下にあった北満を開発する文化運動の機関誌として創刊された本誌は、後藤のいう「文装」の表現であった。しかし日本人の中国文化理解は、儒教的伝統に制約されていく遅れていた。中国の近代化、その一つの表現としての民族運動は日本人にとって理解できなかった。日本の外交機関や陸軍の中国政策はこうしたマイナスを背景としてより多く武断に偏したのである。

科学的な中国研究は、一五年戦争のためほとんど進展しなかったが、日本の限られた中国研究者が中国社会のどの文化的側面について知識をもっていたか、あるいは中国人の精神生活のどの部分に接近することができたかはきわめて興味ある問題である。そのことは在満日本人の中国についての教養をどこまで深めることが可能であったかを考えるうえで大きな意味がある。支配民族としての優越感ともすれば対中国の偏見をつよめたのであるから、これにたいして有識者たちの考えた文化運動がはたして積極的な影響をあたえることができたかも知れなければならぬ。こうしたことは中国人から見れば一刀両断に「文化侵略」として批判されることであろう。しかしわれわれは、事実上依拠して過去の自分たちの行動を大胆に自己批判すべきときに来ているのであるから、本誌が再刻されることはそのためのまたなき資料として歓迎したい。

(戦前、満鉄調査部勤務、戦後、社会運動史研究者)

# 日本の帝国主義的な過去を研究するための史料

岡部 牧夫

『満蒙』創刊十五周年特輯(一九三五年九月)の本文冒頭に、満鉄の理事から貴族院男爵議員になった大蔵公望の「満州文化協会前途多幸を祈る」が載っている。大蔵の日記にも同年七月一三日夜、研究室で「満州文化協会申越の雑誌『満蒙』への寄稿六枚(…)を書く」とあるから、この一文は余人の筆でなく、大蔵自身が書いたものと見てよい。

『満蒙』の発行母体である満州文化協会は、一九二〇年に大蔵らによって創立された。特輯号の一文はそのころの思い出話である。一九年七月に鉄道省を休職して満鉄に入った大蔵は、ロシアの勢力が退潮したこの時期に、「日支提携して北滿への進展を計るべく、就ては先づ日支提携の機関を造る必要がある」と考え、協会の設立を思い立ったという。この時文化を標榜したのは、「目的は経済進展の上にあつたが、其当時として張作霖は必ずしも腹の底まで親日ではなく、又満州人の一般の中にも、相当、排日の気運もあつたので取敢ず、提携は文化方面から初めるが良い」と考えたからだった。要するに文化のカムフラージュのもとに日本の経済進出をはかろうとする機関であり、媒体であった。

協会は満鉄や関東庁の物心両面の援助をうけ、以後民間の満蒙調査・紹介機関の中心になる。活動の内容も、文化というより政治経済なり実業なりの情報収拾とその提供に主眼がおかれてゆく。創刊後三年しないうちに、当初の誌名『満蒙之文化』から文化がはずされたのもまことに正直な話である。その後協会は法人格を得て二六年一月社団法人中日文化協会となり、満州国の発足にあわせて三二年四月には満州文化協会の名にもどる。この間二〇年代の末期から雑誌はかなり性格をかえ、とくに満州事変以後は実務情報の提供がめつり減って、むしろ当初のたてまえであった文化的な面にシフトした。末期には発行元も同人制の任意団体満蒙社にかわり、四三年一〇月号で二三年の誌歴を閉じる。このような変遷をとげた『満蒙』は、日本の帝国主義的な過去を研究するのに興味ふかい史料のひとつである。不二出版のこのたびの壮挙におおいに期待したい。

(著述業・日本近現代史研究者)



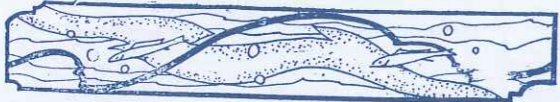
昭和十一年十一月十一日創刊 第十一年第十一號 (巻頭頁十五頁)

テツケス座一峯觀鳳—(122)

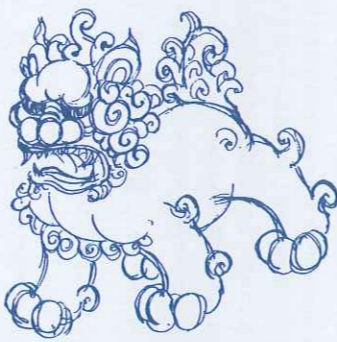
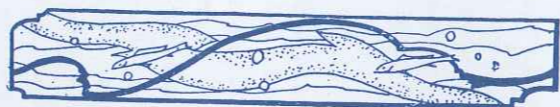


昭和二年一月号

(145) 報の犬狼



報の犬狼—(144)



狼犬の報 (中國童話劇) 八幕 青戸生譯

第一幕 親いぢめ

登場人物 王大(主人 三十歳位、粗野な容貌) 王妻(主人の妻 二十三歳、美しいが無智な態度) 王母(主人の母 六十歳位、温和な老女)

舞臺装置 村のかなり富裕な家庭の一室。正面の机の上に王母は裁縫してゐる。王母と並んで王二は小机の上で書物に讀んでゐる。中央の卓により王大酒をのんでゐる。大分醜態の様子。王妻王大と少し向ひに卓より花札をいぢつてゐる。

(王大) 頻りに酒を飲みながら「へん、眞面目につく(働いたつてつまらないやのんきに其日々を暮すのが一番じゃ、昔の人が今日酒あり、今日酔ふといつてゐるがうまくいつてゐるわい。まあ飲め〜だ。」

(王妻) 王母王二の方を睨みながら「まあ、あなた毎日朝から晩まで酒ばかりで商賣はあがつたりじゃありませんか。それにお母さんや弟さん達は何をすればいいか、みんな喰つぷしのお捕、で一體どうして家がやつて行くとお思つて?」



# 日本の近代文学に、 不可避の存在——『満蒙』

川村 湊

「満州」で生まれ育ったのでもなく、身内に「満州」と関わりある人間がいたわけでもない。それなのに、なぜ「満州」に興味を持つのか。そう問われても、自分でもうまく答えられない。ただ、「満蒙」という漢字と音の連なりに、自分が生きてきた戦後日本と違った風土を感じるという感覚だけだ。エキゾチズムと郷愁が、これまでの「満州」のイメージを蔽っている。むしろ近代史の現場として、そして現在は観光地としての「満州」は知っている。中国人が「淪陷」の苦難と恥辱を噛みしめ、日本人が「五族協和」や「王道楽土」の虚構を築きあげようとした土地。厳しさと豊かさ、文化と野性が混存し、過去と未来の歴史がそこで交錯していたのだ。

戦後世代の私より、もっと若い世代にも「満州」に関心を持つ研究者たちが増えてきた。それはこれまでの政治、経済、軍事、移民といったテーマだけではなく、文学、映画、建築、都市論などの文化史的な広がりを持ったものだ。それはむしろ単なる回顧趣味ではなく、日本の近代の文学や文化を問う時に、避けて通れない問題であると自覚されてきたからだ。戦中、「八紘一宇」を叫び八方に手足を伸ばした大日本帝国は、敗戦後列島内にその手足を引っ込めざるをえなかった。手痛い傷口の痛みはまだその手足に残っていた。だが、それは戦争や植民地についての責任を自覚し、反省したものではなかった。戦後の言説空間から「満州」は排除された。それは見えない幻の国として、もう一度虚構化され、隠蔽されてしまったのである。

日本人が「満州」をどう考え、何を意図し、どのように実践しようとしたのか。『満蒙之文化』から『満蒙』へと変わり、大正と昭和の両時代に刊行された続けた文化雑誌の歴史を追うことは、「満州」という近代日本のモチーフそのものを問うことだ。エキゾチズムと郷愁を超えた、戦後世代による「満蒙」の読み換えは、今から始められねばならない。

(文芸評論家・法政大学教授)

## 政治・経済の側面にとどまらず

## 民族・文化の問題を問う

鈴木 隆史

辛亥革命直後の一九二二(大正元)年七月、日本とロシアは第三次協商をむすび、内モンゴル地方(内蒙古)を東西に二分し、その西部をロシアの、東部を日本の「特殊利益地域」とすることを確認した。これによって日本の勢力圏は従来の南満州から東部内蒙古に拡大され、両地域をあわせた満蒙地方に権益を扶植することが日本の大陸政策の重要課題となり、それにとまって満蒙問題に対する朝野の関心がしだいに増大した。これをうけて一九二〇(大正九)年九月に「満蒙文化の開発」を標榜する満蒙文化協会が発足し、機関誌『満蒙之文化』を発刊した。

同誌は一九二三年四月に『満蒙』と改題されるが、毎号の誌上に満蒙に関する経済問題のほか、民族・文化・教育など多方面にわたる記事を掲載していることに大きな特色があり、当時の日本で満蒙問題が全体としてどのように認識されていたかを知る上で貴重な材料を提供している。戦前の満州(満蒙)問題の研究に資するため、すでに『満鉄調査月報』や『満州評論』などが復刻され、多くの研究者に利用されているが、いずれも政治・経済の問題に重点がおかれており、これまで満州(満蒙)の民族・文化・教育などの分野についての研究材料はきわめて不十分であった。

その意味で、いま不二出版の手で創刊から終刊(一九四三年十月)にいたる『満蒙之文化』『満蒙』の全二八一号が復刻されることは、かつての日本の満蒙に対するかわりを政治・経済の側面にとどまらず、民族や文化の問題など、より広い視野からとらえなおす上で大きな意義があり、その完成を強く希望する。

(歴史研究者)



### 支那婦人の環境及問題

橋 樸

#### 一序 説

支那婦人の興へられたる環境は一言に盡き。曰く大家族組織。昨日まで同じ組織の襍の中に女性を閉込めて居た我々日本人は、比較的容易に支那婦人の苦しい境遇を理解し得る道理である。勿論同じく大家族組織とは云つても、支那と日本との間には著しい相違がある。大雑把に云へば此相違に該當する分量だけ、日本の婦人よりも支那婦人の方が餘計に苦しい立場に置かれて居る道理である。但しそれにも二つの重要な例外のあることを見逃してはならない。其第一は有ゆる階級を通しての母族に寄附たる母(家母)の家族組織内に占める地位であり、第二は傳統的な家族制度を維持し得ないところの社會階級も下層庶民階級に於ける女性の地位である。

支那に婦人問題の起つたのは、抽象的に云へば日本と同じく西洋の個人主義思想に刺戟された爲であり、具體的に云へば一九一九年(民國八年)の五四運動に刺戟されたものである。五四運動の性質は日本の歴史に對抗する單純な民族運動に過ぎなかつたけれども、それは同時に支那青年の心の奥深く潜んで居た解放の要求の一部的表現であつた。五四運動が開展して打倒軍閥運動となり、反帝國主義運動となり、更に平民教育運動や労働運動や婦人運動となつたのは其爲めである。従つて支那の婦人運動も亦他の國々の初期婦人運動と等しく、男性及男性本位社會の偏頗な拘束から女性を解放することを其主旨とするものである。支那に個人主義思想に立脚した婦人解放運動の歴史が始まると、數年にして共產主義者の社會主義思想に立脚した婦人運動が起つた。共產主義者は支那に對して二重の革命が必要だと認めて居る。即ち第一次に資本家的民主主義革命、然る後に共產主義革命と云ふ順序を豫定して居る。従つて彼等の婦人運動に關するプログラムにも亦二段の備へがある。第一次革命のプログラムが國民黨や自由民主主義者のそれと同一範疇に屬するものなることは前記の理由に照らして當然であり、第二次革命のそれのみが彼等等に獨得なものである。

#### 二婦人と奴隸(女子と小人)

先づ環境の方面から考察を始めよう。支那社會では有史以來、男性のみが完全人格を備へると観念されて來た。然らば社會構成の一半を占むる女性は何であるかと云ふと、第一に生殖、第二に家事の爲に勤務する道具たるに止まる。婦人は娘時代から妻たる時代を通じて嚴重に家族組織の中に封じ込まれ、縁日やお寺詣りは申迄もなく、門口に立つて往來を眺めることさへも不禮儀な行爲として非難される。僅かに家族外との交渉の許されるのは家母となつてからのことであるがそれすら僅に親戚近隣の儀禮又は經濟關係を處理し得るに過ぎない。即ち支那の女性の中で完全人格を認められるのは家母のみであるが、然し公務即ち部落統制に關する問題は申すに及ばず、自身の手又は名に於て企業することも許されな

支那婦人の環境及問題(2)

支那の印象(140)



### 滿洲の印象

滿洲を旅した内地に於ける各方面の方々に對し、「この忘れ難い印象」を、おぼろげになつた點などをおぼれしめたところ、左記の諸家へは早速の御回答を賜りました。

(編輯部)

#### 本氣で競争するなら

滿洲へは二度参りましたが、支那人が熱心に實業を營んで居るのに、邦人が只政治権力のお蔭で日を送つてゐるのを残念に思ひました。もつと支那の國土と人間とをよく研究してかゝらねばなりません。邦人は負けずばらひですから、本氣で競争するならば必ず勝つと思ひますが。

#### 鞍山と撫順は別天地

大正二年と十五年と二度まはつたが、その間に邦人の發展の速いのに聊か失望しました。然し鞍山、撫順でまるで別天地の觀があるには驚きました。

#### 民族發展の基礎

一、滿洲の土地の廣くして且つ耕作の行き互れること  
二、支那人労働者が生活程度の低きに拘らず樂天的なること  
三、露西亞人の悲惨なる生活状態を見て國運が個人の幸福に關係することの大なること  
四、民族發展の基礎は優越せる人格の陶冶にあること

#### 正しい信仰を

滿洲に行つて居る日本人は、郷里を離れ、親戚友人を離れて、異郷に出かけて居られるのだから、善い方に志せば、誰に遠慮もなく善いことが出来、又悪い方に傾けば、周囲を憚らず悪い方に傾き得べき可能性がある。それだけに少しも正しい宗教上の信仰をうけられ、自分でも心強く、人にも優しくなるやうな生活をうけてもらふことが出来たら、日本國民の海外發展といふ上から觀ても、これより大なる幸福あるまいと思ふ。

#### も一度行きたい

一、だらけです。忘れ難き印象だらけです。も一度行きたいと思ひます。ちつとも不快を感じませんでした。大連驛の出口が開放的なのはいいと思ひました。

支那の印象(141)

二、これも善い方面はあまりに多すぎて、往復書には書ききれません。  
三、日本人が日貨排斥  
四、日本人が滿洲に到る處で自ら日貨排斥をやつて居ると、即ち日本人の商店から買はずに支那人から買ふ。

## 二〇世紀中国東北地域

### 社会空間へのいざない

西村 成雄

中国近代社会研究への接近がさまざまに試みられつつある。人口史、家族婚姻史、女性史、社団史、宗教史、都市史、会党史、近代化研究、コミュニティ研究、社会心理研究などを主題とした社会史的な分析がひとつの潮流を形成している。中国社会空間をその多様性において視野に収めようとする知的営為は、アメリカや日本はもとより、中国大陸側においてもすでに豊富な成果を提供しはじめている。

たとえば、喬志強主編『中国近代社会史』（人民出版社、一九九二年）はその到達点を表しているし、上海社会史研究の領域でもすでに、張仲礼主編『近代上海史研究』（上海人民出版社、一九九一年）、樂正『近代上海社会心態』（上海人民出版社、一九九一年）などをはじめとして、関連論文も都市史としての実に多様な分析対象をとりあげ、我々の視野を拡大する上での重要な役割を果たしている。

今回の『満蒙之文化』『満蒙』の復刻は、こうした新たな歴史的意識と交差する二〇世紀中国東北社会史研究にとって、きわめて大きな刺激を与えるものと言えよう。一九二〇年から四三年までの約四半世紀をカバーする同時代史的観察として、いわば定点観測的役割を担いうる文献であるばかりか、『満蒙之社会』『社会研究』や『満鉄調査月報』など他の文献との対照によって、よりいっそう中国東北地域社会空間の立体的認識と新たな解釈が可能となるにちがいない。

一九二九年のみをとってみても、一号の「特輯『支那の女』」には橋樑の執筆を含む二〇篇余の論稿がそろえられ、グラフ（写真）は視覚的臨場感を与えているし、二、三号にも「近代中国女子教育思想の変遷」（舒新城）などが継続的に論じられている。四、五号では、「土匪と紅槍会に接するの記」「民衆芸術としての灘簧」などがあり、七、十、十一号に「満州に於ける結核と其の対策」、十一号に「大連市の人力車夫とその生活」といった社会史分析の素材が提供されている。

その意味で、本書の復刻は、このような豊かな社会史の鉱脈を再発掘する課題とその社会空間認識の必要性に気付かせてくれるものとなるだろう。

（大阪外国語大学教授）

## 日中関係史の研究を補う

### 『満蒙』復刻を喜ぶ

丸山 昇

日中関係史、あるいは日本の現代中国研究史を考える時、中国在住の日本人の仕事の意味は大きい。その中でも、当時「満州」と呼ばれた地域にいた人々の比重が大きかったのはいうまでもない。中国現代文学研究の分野からみても、『満州評論』『書香』『満蒙』などに関わった人々が、竹内好氏らの中国文学研究会に先行する仕事をしてきた。もちろんそれらの中には狭い意味で「政治的」に過ぎるものや、作家・作品への理解として不満を感じさせるものもあるが、一方きらりと光るもの、今読んでも新しさを失っていないものもあつた。それらの仕事を通じて、あの時期に中国でこういう仕事にたざざわった人々の、複雑な、時には屈折した生き方を見ることもできる。

戦後の日本では、当事者たちの多くがその後敗戦に至る歴史の中で、何らかの傷を負い、挫折感を持って帰国したためか、自らの仕事についてあまり語ろうとしなかったこともあつて、一部を除いては十分な検討の対象にならずに来た。

『満蒙』については、私はかつて日本における魯迅の翻訳研究史について書いた時、当時早大生だった東憲治君（後の鶴本書店主）を煩わして、早大図書館の所蔵のもののコピーをとってもらったが、その時にも、どこかに完全な揃いが無いものか、と思った記憶がある。

近年『満州評論』『書香』が復刻されたが、この度『満蒙』もようやく復刻されることになったのは、まことに喜ばしい。さしあたりは大正期のものからどうぞだが、この仕事が順調に進行して、引き続き昭和期の分も復刻されることを切望している。

（中国現代文学研究者）

## 満蒙文化の基本的調査資料の

### 覆刊を喜ぶ

波多野太郎

過ぐる大正九（一九二〇）年の秋、『満蒙之文化』が発刊せられ、同じく十二年の春、『満蒙』と改題せられ、爾來昭和一八（一九四三）年まで続刊せられた。但し現在各処に分散収蔵せられ、研究者にとって不便極まりない。そこで今回不二出版が、自家蔵本と早大図書館蔵本とを併せて大正期を覆刊、逐次続刊完了することになったのは、合浦珠還と言う可く、洵に大慶に勝へない。該誌は満蒙文化協会、中日文化協会、満州文化協会という名称の変遷を経た協会の機関誌で、該協会は第一次世界大戦後、日清日露の戦いを経て満蒙に培った権益が外圧に由る危機に瀕した際、満蒙の現状をよく認識させ、産業資源の開発と文化思想の建設に資せんという意図により設立せられ、文化開発と住民の福利増進とを助成し、これが正確な調査を実施すること等を事業とするものであつた。それ故該誌は、当時の国是的な論陣の外に、文化史的意義の闡明に努力し、民族、地理、歴史、土俗、自然科学、考古関係の文章が多く、満蒙に対する史的使命の根柢を作り上げるという方向であつた。それ故現在の学会にとっても大いに貴重な史料となりうる。

一例を挙げれば、満鉄の音楽語物である金九経の「吃螃蟹」（不二出版「中国語文資料集刊」第三篇参照）、辻忠治の「蓮花落」、石原巖徹の「其後の支那劇」、辻武雄の「支那梨園界の麒麟兒」、山縣初男の「支那小説に就て」、三浦義臣の「封神演義」、崑山喜一の「金の上京址の陶片其の他」、和田清の「蒙古史の大勢」、村田治郎の「満州古美術史略」、園田一亀の「韃靼漂流記に就ての研究」、山口松次郎の「満州長安出土の漢代文字瓦当」、星武雄の「熱河避暑山荘及郊外の八大廟」等枚挙に遑がなく、この一斑で全豹を伺われたい。

当時王道楽土建設や満蒙建設の世界史的意義の闡明に努力する層が歴然と存在していた。今や日本人は噫々満州といったノスタルジヤだけに浸ったり、大作「落陽」を一顧だにしないやうな心理を払拭し、戦後の史観から脱皮し、冷静客観的に民族の遺した業績を評価し、世界的視野にたつて日本の歴史の前進と建設とに資すべきではあるまいか。古人は言った温（煖）故知新と。敢へて本書を況く江湖に薦むる所以。

（文学博士・横浜市立大学名誉教授）

### ●関連図書のご案内

南満州鉄道株式会社刊（大正8年～昭和6年刊）

**満鉄調査時報** 全31巻・別冊1（品切）

別冊II 総目次・執筆者索引

AS5判・B5判・上製・函入・総約21、400頁

揃本体価格490、000円

『満鉄調査時報』は、南満州鉄道株式会社総務部（のちに庶務部）調査課発行の月刊誌である。当初「調査時報」として大正八年二月創刊、同九年九月（第六号）までB5判で刊行され、その後一時中断、大正十一年三月（第七号）から菊判となり毎月定期的に出される。昭和五年二月（通巻一〇一号）より誌名が『満蒙事情』となり、昭和六年八月（通巻一九号）まで刊行され、以後『満鉄調査月報』となる。散逸が激しい満鉄の資料の中でも、貴重な資料である。

南満州鉄道株式会社刊（昭和6年～昭和19年刊）

**満鉄調査月報** 全48巻・別冊1（品切）

別冊II 総目次・執筆者索引

AS5判・上製・函入・総約40、000頁

揃本体価格684、000円

『満鉄調査月報』は、『調査時報』『満蒙事情』の巻号を継承し、昭和六年九月（第一一巻第九号）から、同一年二月（第二四巻第二号）まで刊行された。南満州鉄道株式会社、いわゆる満鉄の調査・研究は豊富な資金を背景として歴大な成果を生み出し、その調査報告書、研究成果は今日に生きるものが少なくない。とりわけ『満鉄調査月報』は、当時の『満蒙支』を中心とするアジアの政治・経済・社会・歴史・民俗等の全分野にわたる資料の宝庫である。

**満州移民関係資料集成** 全40巻・別冊1（品切）

別冊II 解説（岡部牧夫）

B5判・上製・総17、940頁

揃本体価格680、000円

いわゆる「満州事変」に始まる一五年戦争における農業移民は、国内の農業不況を解決し、同時に日本帝国主義の人間トーチカとしての武装移民であった。本資料集成は、この「満州農業移民」に関する資料を、立案計画から実施に至る会議録・調査報告書類等を収集し、原文のまま復刻したものである。第I編、第III編、第IV編には、当時「極秘」あるいは「秘」のため、一般には公開されなかった文書類を収録。第II編には分村移民・移民村等の未公開資料をも収録。詳細な資料解説を付す。

# 満蒙

前身誌——  
『満蒙之文化』を含む

第1期(大正期)全31巻

大正9年9月↓昭和2年4月

## ●復刻版概要

体裁——A4判(第1〜7巻)・A5判・上製本・総14、222頁

誌名の  
変遷の——『満蒙之文化』大正9年9月↓大正12年3月(A4判)

『満蒙』大正12年4月↓昭和18年10月(A5判)

本体価格——大正期・全31巻 **15,580,000円**

別冊——総目次・索引(別冊のみ分売可)本体価格三、〇〇〇円

## ●配本予定

### 第1期(大正期) 配本予定

第1回配本	第1巻〜第3巻	大正9年9月↓大正10年8月	1、348頁	'93年12月	本体価格 <b>15,400,000円</b>	
第2回配本	第4巻〜第7巻	大正10年9月↓大正12年3月	1、682頁	'94年5月		
第3回配本	第8巻〜第11巻	大正12年4月↓大正12年12月	1、822頁	'94年8月		
第4回配本	第12巻〜第15巻	大正13年1月↓大正13年8月	1、874頁	'94年12月		
第5回配本	第16巻〜第19巻	大正13年9月↓大正14年4月	1、890頁	'95年5月		
第6回配本	第20巻〜第23巻	大正14年5月↓大正14年12月	1、920頁	'95年8月		
第7回配本	第24巻〜第27巻	大正15年1月↓大正15年8月	1、860頁	'95年12月		
第8回配本	第28巻〜第31巻	大正15年9月↓昭和2年4月	1、826頁	'96年5月		
						第21〜30回配本(11冊) 本体価格 <b>7,200,000円</b>

### 第2期(昭和期①)

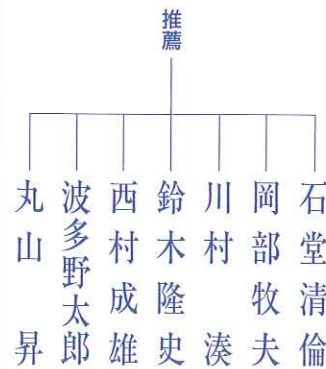
第9〜19回配本——第32巻〜第77巻 昭和2年5月↓昭和9年12月

### 第3期(昭和期②)

第20〜30回配本——第78巻〜第121巻 昭和10年1月↓昭和18年10月

第1期完結後

逐次刊行



本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

# 不二出版

〒113-0023 東京都文京区向丘一-21-2  
 TEL 〇三-三八二-四四三三  
 FAX 〇三-三八二-四四六四  
 振替 〇〇一六〇・二九四〇八四

『満蒙之文化』という誌名で創刊した『満蒙』は、文字どおり旧植民地＝満蒙についての総合雑誌であり、第一級の基本資料である。

●復刻の辞

従来、満州（中国東北部）についての研究は、主に政治・経済的側面を中心に行われ、『満鉄調査月報』、その前身誌『満鉄調査時報』、および『満州評論』などが研究資料として復刻刊行されている。そして近年の研究は、文化史、文学史などの広い範囲にわたって、旧植民地・満州を見直す動きにあり、その基本的資料のひとつとして、『満蒙』の復刻が要望されてきた。

『満蒙』は、大正9（一九二〇）年9月、満蒙文化協会発行の『満蒙之文化』創刊に始まり、大正12（一九二三）年4月に『満蒙』と改題し、同時に判型をA4判からA5判にあらため、昭和18（一九四三）年10月まで二八一号、四半世紀にわたって刊行された「満」「蒙」に関する総合月刊誌である。

創刊当初より、「満州」最大の植民地国策会社・満鉄の庇護の下、満鉄

# 満蒙

第I期 〔前身誌——『満蒙之文化』を含む〕 全31巻・本体揃価558,000円 完結！  
引き続き第II期刊行。

VOL.1 No.1

## THE LIGHT OF MANCHURIA 満蒙之文化

第一卷 第一號

○大連港 船主船客船の運賃

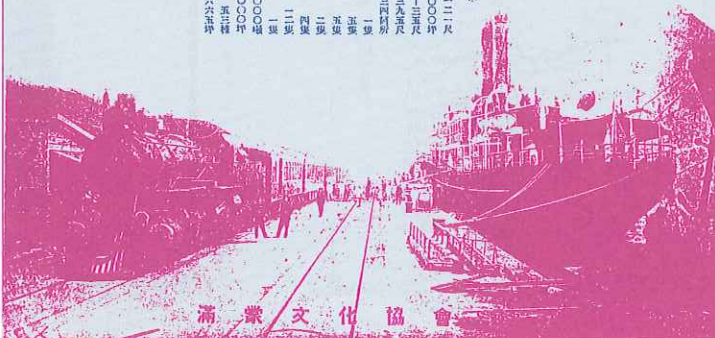
船主運賃	114.11元
船客運賃	50.000元
手荷運賃	111.11元
若狭運賃	111.11元
船積地代	111.11元
二階五半同積	111.11元
一階同積	111.11元
二階	111.11元
一階	111.11元
500000元	111.11元
500000元	111.11元
700000元	111.11元

船積運賃

一等	8千増鉄
二等	6千増鉄
三等	4千増鉄
四等	3千増鉄
五等	2千増鉄
六等	1千増鉄
七等	500増鉄
八等	250増鉄
九等	125増鉄
十等	62.5増鉄

船積運賃

一等	1000増鉄
二等	500増鉄
三等	250増鉄
四等	125増鉄
五等	62.5増鉄
六等	31.25増鉄
七等	15.625増鉄
八等	7.8125増鉄
九等	3.90625増鉄
十等	1.953125増鉄



満蒙文化協会

調査部の研究成果を毎号掲載するなど、天野元之助、大塚令三、田中忠夫等満鉄調査部の筆者が多数登場する一方、文学、言語、家族、宗教、考古学等、汎く「満蒙」に関する論文、翻訳を載せている。この様な、豊富な内容をもちながら、本誌を所蔵する図書館・機関は少なく、充分利用されているとはいいがたい。弊社では、全号を三期に分け、刊行する予定である。

不二出版

第2期 〔昭和期①〕 全46巻——本体揃価702,000円

# 満蒙

第2期(昭和期①)全46巻

昭和2年5月↓昭和9年12月

## ●復刻版概要

体裁——A5判・上製本・総19、784頁

誌名の  
変遷——『満蒙之文化』大正9年9月↓大正12年3月  
『満蒙』大正12年4月↓昭和18年10月

価格——昭和期①・全46巻 **7,000,000円**

別冊——総目次・索引(全3期完結後刊行予定)

## ●配本予定

### 第2期(昭和期①)配本予定

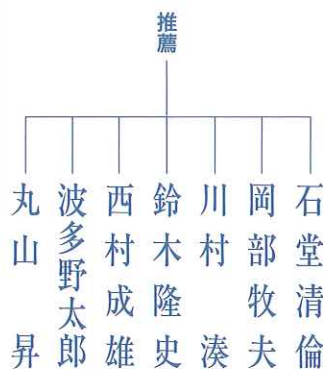
第9回配本	第32巻～第35巻	昭和2年5月↓昭和2年12月	1,718頁	'96年8月
第10回配本	第36巻～第39巻	昭和3年1月↓昭和3年8月	1,828頁	'96年12月
第11回配本	第40巻～第44巻	昭和3年9月↓昭和4年6月	1,912頁	'97年5月
第12回配本	第45巻～第49巻	昭和4年7月↓昭和5年4月	1,904頁	'97年8月
第13回配本	第50巻～第53巻	昭和5年5月↓昭和5年12月	1,600頁	'97年12月
第14回配本	第54巻～第57巻	昭和6年1月↓昭和6年8月	1,684頁	'98年5月
第15回配本	第58巻～第61巻	昭和6年9月↓昭和7年4月	1,698頁	'98年8月
第16回配本	第62巻～第65巻	昭和7年5月↓昭和7年12月	1,694頁	'98年12月
第17回配本	第66巻～第69巻	昭和8年1月↓昭和8年8月	1,990頁	'99年5月
第18回配本	第70巻～第73巻	昭和8年9月↓昭和9年4月	1,912頁	'99年8月
第19回配本	第74巻～第77巻	昭和9年5月↓昭和9年12月	1,814頁	'99年12月

各配本ごと

本体価格 **7,000,000円**

第20～30回配本——第78巻～第121巻 昭和10年1月↓昭和18年10月

第2期完結後逐次刊行予定



本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

# 不二出版

東京都文京区向丘一丁目二二  
TEL 03-3812-4433  
FAX 03-3812-4464  
振替 00160・294084

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

# 『満蒙之文化』という誌名で創刊した『満蒙』は、文字どおり旧植 民地＝満蒙についての総合雑誌であり、第一級の基本資料である。

## ●復刻の辞

従来、満州（中国東北部）についての研究は、主に政治・経済的側面を中心に行われ、『満鉄調査月報』、その前身誌『満鉄調査時報』、および『満州評論』などが研究資料として復刻刊行されている。そして近年の研究は、文化史、文学史などの広い範囲にわたって、旧植民地・満州を見直す動きにあり、その基本的資料のひとつとして、『満蒙』の復刻が要望されてきた。

『満蒙』は、大正9（一九二〇）年9月、満蒙文化協会発行の『満蒙之文化』創刊に始まり、大正12（一九二三）年4月に『満蒙』と改題し、同時に判型をA4判からA5判にあらため、昭和18（一九四三）年10月まで二八一号、四半世紀にわたって刊行された「満」「蒙」に関する総合月刊誌である。

創刊当初より、「満州」最大の植民地国策会社・満鉄の庇護の下、満鉄

# 満蒙

第Ⅰ期（大正期） 全31巻・本体揃価558,000円＋税  
第Ⅱ期（昭和期①）全46巻・本体揃価762,000円＋税

VOL.1

No.1

## THE LIGHT OF MANCHURIA 満蒙之文化

第一卷 第一號

○大連港 前江船渠の完成  
防務局長 一三二二尺  
汪内閣閣員 九〇〇〇円  
千原閣下 三三三三尺  
岩間閣員 一三三三九尺  
松田閣員 五五五五尺  
二河閣員 一五五五尺  
一河閣員 八八八八尺  
六平閣員 二二二二尺  
三平閣員 五五五五尺  
一平閣員 一五五五尺  
一平閣員 六〇〇〇〇円  
一平閣員 六〇〇〇〇円  
一平閣員 七〇六六尺



調査部の研究成果を毎号掲載するなど、天野元之助、大塚令三、田中忠夫等満鉄調査部の筆者が多数登場する一方、文学、言語、家族、宗教、考古学等、汎く「満蒙」に関する論文、翻訳を載せている。  
この様な、豊富な内容をもちながら、本誌を所蔵する図書館・機関は少なく、充分利用されているとはいえない。弊社では、全号を三期に分け、刊行する予定である。

不二出版

第Ⅲ期（昭和期②） 全44巻——本体揃価7016,000円＋税  
別冊1



# 満蒙

## 第Ⅲ期(昭和期②)全44巻・別冊1

昭和10年1月↓昭和18年10月

### ●復刻版概要

体裁——A5判・上製本・総20、004頁

本体——昭和期②・全44巻+別冊1 7915、000円+税

別冊——総目次・索引(最終回配本に収録・分売可)3、000円+税

★第Ⅰ期(大正期) 第Ⅱ期(昭和期①) 第Ⅲ期(昭和期②)にて完結ノ  
 [全121巻・別冊1 全巻揃価格2、145、000円+税]

### ●配本予定

#### 第Ⅲ期(昭和期②) 配本予定

第20回配本——	第78巻～第81巻	昭和10年1月↓昭和10年8月	1、6800頁	ISBN4-8350-4735-4	'00年5月
第21回配本——	第82巻～第85巻	昭和10年9月↓昭和11年2月	1、9224頁	ISBN4-8350-4740-0	'00年8月
第22回配本——	第86巻～第89巻	昭和11年3月↓昭和11年10月	1、7888頁	ISBN4-8350-4745-1	'00年12月
第23回配本——	第90巻～第93巻	昭和11年11月↓昭和12年6月	1、7200頁	ISBN4-8350-4955-9	'01年5月
第24回配本——	第94巻～第97巻	昭和12年7月↓昭和13年2月	1、8500頁	ISBN4-8350-4970-5	'01年8月
第25回配本——	第98巻～第101巻	昭和13年3月↓昭和13年10月	1、644頁	ISBN4-8350-4975-6	'01年12月
第26回配本——	第102巻～第105巻	昭和13年11月↓昭和14年9月	1、784頁	ISBN4-8350-4980-2	'02年5月
第27回配本——	第106巻～第109巻	昭和14年10月↓昭和15年9月	1、912頁	ISBN4-8350-4985-3	'02年8月
第28回配本——	第110巻～第113巻	昭和15年10月↓昭和16年9月	1、894頁	ISBN4-8350-4990-X	'02年12月
第29回配本——	第114巻～第117巻	昭和16年10月↓昭和17年9月	1、804頁	ISBN4-8350-4995-0	'03年5月
第30回配本——	第118巻～第121巻	昭和17年10月↓昭和18年10月	1、700頁	ISBN4-8350-4779-6	'03年8月

第20～29回配本 本体価72,000円+税

第30回配本 本体価75,000円+税

推薦

石堂清倫  
 岡部牧夫  
 川村湊  
 鈴木隆史  
 西村成雄  
 波多野太郎  
 丸山昇

表示価格は、全て税別

# 不二出版

〒113-0023 東京都文京区向丘一丁目二二  
 TEL 〇三-三八二-四四三三  
 FAX 〇三-三八二-四四六四  
 振替 〇〇一六〇・二・九四〇八四